僕ガ壊シタ最初ノ家族

IOTA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕ガ壊シタ最初ノ家族

【Ｎコード】

Ｎ２８０５Ｅ

【作者名】

ＩＯＴＡ

【あらすじ】

異常な環境、理不尽な問答、深まる謎。驚愕のラストが待ち受ける、ショートミステリーホラー。

1（前書き）

※警告※

この作品には軽度な性表現と、極度の残虐表現が含まれています。

苦手な方はご注意ください。

1

これから語る、僕の家族に起きた惨劇は、まぁ、総じて言えば不運だったとしか言いようがない。

不運以外にも様々な要因があったのかもしれないが、やっぱり原因は運の悪さ、その一言に尽きるだろう。

正直、事件が解決した現在も僕の中ではカタが付いておらず、それを済ませに、これから警察病院へ、犯人に会いに行く次第なんだけれども。

それでも、ただ一つ、最初からはっきりとわかっていた真実がある。

君の家族はどうだった？　と問われれば、僕は即答でこう応えるだろう。

『僕の家族は壊れていました』

●――――

寝付きが悪く、中々眠れない。○
疲れていないのに、なんとなく体がダルい。○
空腹のはずなのに、食欲がわかない。×
どうしようもなく気分が落ち込む事がある。×
出来る限り他の人と話したくない。×
自分が人からどう見られているのか、気になって仕方がない。×
・・・・・・・・・・

うんざりする・・・・・・。

目の前に置かれた『心の健康チェックシート』を睨め付けて、僕は大仰に嘆息した。
もう何枚目になるかわからない。
これだけ毎日チェックしてたら、そっちもネタ切れになるだろうと、○×を記す度に期待しているのだが、どこぞの精神科医の引き出しは、僕の想像の遥か上をいっているようだ。

「・・・・・・・・・・」

もうめんどくさくなって、質問を読まずに全てに×を付け、ボールペンを放り投げた。

「ちゃんとやって。あなたのためなのよ」

目の前の女はボールペンを拾い上げ、優しく机の上に置いた。

「あなたのためって・・・・・・、いい加減にしろよ。こんなの毎日やってどうなるんだ？　逆に心が不健康になるよ」

女は微かに嘆息して、それもそうね、と続ける。

「じゃあ、今日は単刀直入に訊くわ」

「・・・・・・・・・」

「どうしてお姉ちゃんを殺したの？」

「――――――」

確かに単刀直入だった。それはいつもだったら最後に持ってくるはずの質問、しかし、いつもと同じ質問である事には変わりない。

「だから殺してないって。何度言ったらわかるんだよ」

「・・・・・・・・・」

「僕はその時、家に居なかったんだ。アンタ知ってるだろ？」

「・・・・・・・・・」

「ほんとにもう、いい加減にしれくれよ・・・・・・・」

うなだれる僕を見て女は、今日はもういいわ、と残して、部屋から去った。

味も素っ気もない正方形のコンクリート部屋、残されたのは僕と机とペンと紙切れ。

「もう、ほんとに、いい加減にしれくれよ・・・・・・」

僕は再び呟いて、女が出て行ったドアに向けて、力なくペンを投げ付けた。

僕がここにぶち込まれてから、どれぐらい経ったかわからない。故に、僕の姉貴が死んでからも、どれぐらい経ったのかわからない。

ある日、僕はいつものように午後九時頃バイトに出かけ、深夜に帰ってきたら、姉貴が倒れていた。

風呂場だった。シャワーを浴びに風呂場に入ったら、顔面を血で真っ赤に染めた、裸の姉貴が倒れていた。

近くには僕が小学生の頃使っていた金属バットが、見慣れぬ朱に染まって、転がっていた。

その後は、あれよあれよと今に至る。

まるで不健康にするためのように繰り返される心の健康チェック。

こちらの言い分なんか聞きもせず、執拗に僕に犯行を認めたがらせる女。

そして、ゆっくりだが、確実に壊れていく僕の精神(こころ)。

いい加減にしてくれ、頼むから・・・・・・。

2

今日もまた、毎日と同じように、対面の椅子に女が座り、心の健康チェックシートを差し出してきた。

「・・・・・・・・・」

いつもと同じように、僕はそれを受け取らず、無言で睨み続ける。いつもだったら僕がそれを受け取るまで何も言わない女だが、どういう訳か、今日は口を開いた。

「あなたは、お姉ちゃんが殺されたその時、何をしてたの？」

軽い驚きを覚えながらも、応える。

「・・・・・・知ってるだろ。バイトだよ」

「バイトは何をしているの？」

「居酒屋の厨房」

「どこの居酒屋？」

「・・・・・・駅前の『金時（きんとき）』」

女は、そ、と素っ気無く応えると、手元のレポートをペラペラ捲って、

「それはおかしいわね。先方に確認してみたけど、あの日、あなたは居なかったって」

「――――――！」

「しかも、お姉ちゃんが殺される一週間前に辞めてるって言うじゃない」

「・・・・・・・・・・」

知ってるくせに訊いてきたのか、コイツ最悪だ。

女はレポートをパタンと机に置いて、肘を置いて身を乗り出す。

「なんで嘘を付いたの？」

「・・・・・・・・・・」

「あの日、本当は家に居て、お姉ちゃんを殺したからじゃないの？」

「違うッ！　僕は確かに出かけたっ！　アンタ知ってるだろ！？」

それに対しては女は応えず、

「じゃあ、どうして嘘を付いたの？」

と無表情で繰り返すのだった。

僕は暫く迷ってから、

「・・・・・・言い難かったんだよ・・・・・・」

「というと？」

「・・・・・・フリーターで、ずっとバイトを点々としてたから、また辞めたって言いずらかったんだよ」

「そう・・・。それであなたはバイトに行くと嘘を付いて、一体どこに行ってたの？」

「近所の公園で、・・・時間潰してた」

「そう、夜の公園に誰か居た？　居なかったでしょう。じゃあアリバイはないのね」

「――――！」

「あなたが家にこっそり帰って、お姉ちゃんを殺して、”近所の山林にその死体を埋めても”、おかしくはないわね」

「――な、う、埋めたッ？　どういう事だよそれ、知らないぞっ！？　ふざけるなよッ！　なんでそんなに僕を疑うんだよっ！？　どうしても僕を犯人にしたのかよっ！　おかしいだろ！？　だってアンタは――」

「今日はここまでね」

と、女は僕の台詞を最後まで待たずに立ち上がり、足早に去った。

「・・・・・・・・・」

また、いつもと同じように独り残された僕は、机を引っくり返して、椅子を蹴り飛ばし、その場に崩れ落ちた。

だっておかしいだろ・・・・・・？

警察ではなく、何処とも知れない地下室に軟禁されて取り調べの真似事を受けるこの状況も、

まるで自分とは関係ない事のように飄々と淡々と、無表情・無感情に語るあの女も、

おかしいだろ・・・・・・どう考えても。

3

連日続く催眠じみた取り調べ。
僕の心が折れるか精神が参るまで、つまり僕が犯行を認めるまで開放する気はないのだろう。
だから、この状況を打開するために、今日は僕から語る事にする。

「姉貴の事どこまで知ってる？」

朝食を運んできた女に、そう問い掛けた。

「引き篭もりだったのは当然知ってるよな。じゃあ、引き篭もった原因を知ってるか？」

「・・・・・・・・・」

無言でトレイを机に置く女、聞いてるかどうかわからないが、勝手に喋らせてもらう。

「アイツ高校の時、彼氏が出来たんだよ。最初は幸せそうだったけど、実はその彼氏がヒドイ男でね。輪姦（まわ）されたらしいんだ、一回一万ってね。それで男性恐怖症になって外に出れず、ずっと家に篭る

ようになった」

「・・・・・・・・・」

「でも、僕の前では普通に喋れた。男性恐怖症の女が、この世で唯一心を許せる男だ。何が言いたいか、わかる？」

そこで、ようやく僕の言いたい事が伝わったのか、不審が混じった視線を寄越す女。

「アイツは僕のことが大好きだったんだ。姉弟としてじゃない、一人の男として。つまり惚れてた」

「――――・・・・・・」

女の表情は変わらないが、それでもわかる、内心では驚愕している事が。これでも長い付き合いだ。

僕は畳み掛けるように言う。

「当然、近親相姦はいけない事だと知ってたけど、僕も思春期の男だし、後はどうなるかわかるよな？　名誉のために言っとくけど、最初に擦り寄って来たのは姉貴の方だぜ。夜な夜な僕のベッドに忍び込んで、耳元で囁くんだ。”ねぇ、しよう”ってね。ハハッ、笑えるだろ！？　輪姦（まわ）されて男性恐怖症になった癖に、性欲だけは一人前なんだから！」

無表情だが、どこか蔑むような眼で見据えてくる女。

それに対し、僕は自分の唇が自然と吊り上がっているのを感じた。

姉との近親相姦の体験談を笑顔で話す弟。
精神を壊すというのがこの女の目的ならば、それはとうに達成できているのかもしれない。しかし、これは前置き、本当の言いたい事はこれからだ。

「そんなイカレた姉貴だ。何をしたっておかしくないよな？　例えば、この世で唯一信頼している男から、”いい加減ウザイんだよ”って言われたら、どうすると思う？」

「・・・・・・・・・」

「”自殺”、ぐらいはするよなぁ。どうやったかは知らないけど、バスタブの縁に頭を打ち付けたり、僕のバットで自分の頭をブン殴るぐらいは、やってのけるんじゃないのかなぁ・・・・・・」

「それはないわ」

「――――、え」

唐突に、ここで始めて、女は僕の推理を斬り捨てた。

「状況から見て、あなたのお姉ちゃんは間違いなく他殺だった。そして、お姉ちゃんを殺したのは間違いなくあなた。あなたはお姉ちゃんを殺して、死体を近所の林に埋めたの」

「――――な、なんだよそれっ！　前も言ってたけど、死体を埋めるのは不可能だろッ！？　だってアンタ、あの後すぐに僕をここに閉

じ込めたじゃないかッ！　そんなの閉じ込めた張本人のアンタが一番よく知ってるだろ！？　第一、殺したのだって証拠はあるのかよッ！？」

「・・・・・・・・・」

女は応えず、また明日、と吐き捨てて、去って行った。
ガシャン、と間髪入れずに錠の落ちる残酷な音が響く。
閉ざされた空間、密室、独房。

「～～～～～くっそッ。ふざけんなよォッ！　出せッ、ここから出せェ！！」

僕は置かれたトレイを引っくり返して、叫ぶが、その声が誰かに届くのかもわからない・・・・・。

4

当然、脱走を企てた事もあり、その回数も一度や二度ではない。
普段は錠が掛けられた独房だ。チャンスはあの女が入ってきた時か、出て行く時に限られる。
故に、女を力尽くで押さえつけ、ドアから出ようという陳腐な作戦しか思いつかないのだが、その力尽くの部分からして、もう失敗なのだ。
あの女は常にスタンガンを持っている。
少し近付いただけで、スタンガンを取り出し、間合いに入ろうものなら遠慮なしに押し当てられ、丸一日朦朧(もうろう)とした意識で過ごす事になる。
今まで手を替え品を替え、様々な方法で脱出しようとアプローチを試みたのだが、残るのは身体に電撃が疾駆する痛みと恐怖だけだった。
・・・・・・・まったくあの女は、イカれてる。
「・・・・・・・・・・」
ところで、どういう訳か、今日はあの女が来ない。
取り調べがない日も、食事だけは運んで来たのに、・・・兵糧攻

めだろうか？

ガチャン

ギィィィ

と、思っていたら今日も来た。

「・・・・・・？」

しかし、今日はいつもと様子が違う。

いつもだったら栄養管理された手作りの料理を運んで来るのに、

机に置かれたのは菓子パン一つ。

塗ったくった厚化粧も、今日はスッピン。

そして何より、その顔色に浮かぶのは明らかな心労。

椅子に座って、日課の『心の健康チェックシート』を差し出す事もせず、俯いて深い溜め息を吐いた。

「・・・・・・・・・・」

こっちの精神が参る前に、女の方が参っているのかもしれない。

まぁ、こんな状況が長く続けば無理もない。

僕としては、この機会（チャンス）を逃す手はない。

「なんか顔色良くないけど、・・・どうしたの？」

出来るだけ優しく、それでいて不審にならないように問い掛けた。

「・・・・・・・・・」

女は無言でこちらに視線を寄越し、また俯いてしまった。
・・・・・・焦るのは良くない、ここは相手が口を開くまでじっと辛抱だ。

どれぐらい経っただろうか、僕は置かれた菓子パンに手を伸ばす事もせずじぃっと女を、女はその視線を受け止めようとはせず、ひたすらに俯いて、
不意に、

「今日、あなたのお父さんと話したわ」

「――――と」

父さん――!?　と、出掛かった驚きを何とか飲み込んで、僕は関心のない振りをする。

「へぇ、なんて言ってた？」

「・・・・・・もう、やめにしようって」

「――――、ふ、ふぅん」

・・・・・・驚いた。父さんは知っていたのか。いや、当事者なんだから知っていて当然なんだけど、僕は全てこの女が秘密裏に行っている独断だと勘違いしてたようだ。

「そ、それで、どうするの・・・・・・？」

僕の上ずった問いに、女は、

「ええ、もう、やめにしましょうか――――」

――――母さん、疲れちゃった。

そう言って立ち上がり、スタンガンを取り出した。

「――――！　つ、疲れたってなんだよッ！　ぼ、僕を殺すのか！？　なんで！？　ふざけんなよ！！　散々こんな所に閉じ込めておいて・・・・・・」

女は聞こうともせず、危うい足取りで一歩一歩、僕に近付く。

「ま、待てよ。落ち着こうよ。だって僕、本当に姉貴を殺してないんだよ。信じてよッ、信じてくれよオォッ！　母さんッ！」

部屋に隅に追い詰められた僕は、必死に哀願の声を上げた。それに女は、

「――――ええ、知ってるわ」

素っ気無く、実に素っ気無く、そう応えた。

「は――――、な、なんだって？　知ってる？　じゃあなんで・・・

？」

振り上げられたスタンガンを見ながら、

「だってお姉ちゃんを殺したのは母さんだもの。ごめんねサトル」

僕は、女の言う、真実を聞いた。

ゴツッ

5（前書き）

※警告※

この話には残酷な描写があります。

ご注意ください。

5

ゴツッ

頭部を殴りつけるように押し当てられたスタンガン、そのスイッチが入ろうとした。

瞬間、

「サチエッ！」

後ろから現れた影が、スタンガンごと母さんを突き飛ばした。

「やめるんだサチエッ！　もう、もうやめにしようっ！」

「――――あ、あなた」

それは、父さんだった。
息を荒立て、肩を上下させながら、倒れた母さんを見据えている。
「どうして、ここがわかったの？」
母さんはフラフラと立ち上がりながら、そう問い掛けた。その手にはスタンガンが握られている。
「後を付けたんだ。じきに警察も来る」
警察！？　僕は安堵より先に驚きを感じた。
”実の母親に監禁されて、ついさっき父さんもそれを知っている事を聞かされた僕は、父さんもグルだと思っていたのに”、違うのか？
僕の疑問が顔に出ていたのか、父さんは僕を一瞥し、語りだした。
「サトル・・・、すまない、本当にすまない。悪いのは俺だ。俺なんだ・・・。全て、俺の所為(せい)なんだ」
「――――とう、さん？」
「俺が、あの時、あんな気を起こさなければ、こんな事には・・・・・・全て俺の責任だ」
「な、なに言ってんのかわかんないよっ！　説明してくれよッ！」
「私が――――」
フラリと、一歩父さんに近付きながら、母さんが言った。

「私が説明してあげるわ、サトル」

「母さん・・・・・・？」

「この男はねぇ、実の娘を抱いたのよ」

「――――――、え」

「あなたも言ってたじゃない、お姉ちゃんは男性恐怖症だったって。でもねぇ、お姉ちゃんが心を許したのは、あなただけじゃないのよ。同じ家族なんだから、お父さんにだって、そうなる資格があるってこと」

母さんは、吹けば飛ぶようなか細い声で、続ける。

「あなたからお姉ちゃんの話を聞かされて、全て繋がったわ。あの日、あなたお姉ちゃんに言ったんでしょう？　”いい加減ウザイ”って、そうなればあの子が、心許せる残りの男、つまりお父さんに靡(なび)く事だってあるわ」

「そ――、んな――――――」

僕は絶句して父さんを見た。

父さんは何も応えず、その顔は、本当に苦しそうで、悲しそうで、辛そうだった。

母さんはユラユラと、左右に肩を揺らしながら続ける。

「そして、お姉ちゃんに言い寄られたこの男は、実の娘とセックス

したの・・・・・・。まったく、信じられない信じられない信じられない信じられない。有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない。気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪いッ！！」

「す、すまないサチエ。俺は――――」

「うるさい。今サトルと話してるのよ、アナタ」

父さんの弁解を遮り、母さんは他人を見るようないつもの無表情で、僕を見る。

「それで、運悪く、私はそれを見てしまった。長年寄り添ってきた夫が、長年育ててきた娘と、裸で抱き合ってるのをッ、私は見たッ！！　・・・・・・・・・もう、何もわからなくなった、ただ、”あの子を殺さなくっちゃ”、そう思った。そして、セックスが終わった後、暢気にシャワーを浴びてる娘を、私は殺した。あなたのバットでね」

「――――――」

僕は絶句する事しかできない。

しばらくして、ようやく言うべき台詞が見つかり、口にする。

「なんで、僕を閉じ込めて、犯人にしようと思ったの・・・？」

「あなたはまだ若いんだから、未来があるじゃない。人を一人殺しても、未来があるわ。でも私にはない、この年齢で、人を殺してしまったら、それは自分を殺すのと同じ・・・・・・。それに、”家族”なんだから、助け合うのは当然でしょう？」

母親(おんな)は笑う、フフフフフフフ、と、憑り付かれたように、何かを失くしたように、壊れた人形のように。

・・・・・ずっと僕を閉じ込めて、ずっとずっと僕に言い聞かせて、僕の精神(こころ)がおかしくなって、僕がやってもいない罪を認めるまで、自分の罪を被ってくれるまで、取り調べの真似事を続けるつもりだったのか・・・・・・。

「始めはね、この男も同意したのよ。お姉ちゃんは引き篭もりだし、あなたも無職で引き篭もりみたいなモノだから、世間には絶対バレないって、でも、ここに来てもう止めようって・・・・・だから、やめにしましょう」

そう言って、母さんはスタンガンを落とした。

「サチエ・・・・・」

安堵したように呟いて、父さんは母さんに抱き付いた。

「すまない、サチエ。すまないすまない、本当にすまない。全て俺の所為だ。全部俺が悪いんだッ。自首しよう、自首しよう。なっ」

母さんの背中を撫でながら、父さんは必死に繰り返す。

しかし、――――ダメだよ父さん。

僕はこの後どうなるか、なんとなく予想できていた。

だって母さんはもう、コワレテしまっているんだから、コワレタ物はそれぐらいじゃ直らないんだから・・・・・・。

「――――、？」

音はしなかった。

ただ驚く父さんの顔を、無表情の母さんが見つめていた。

遅れて倒れる父さん。その腹部は真っ赤に染まっていて、母さんが握る包丁も真っ赤に染まっていた。

「そうね、全部あなたの所為よ。でも安心して、私達は家族なんだから、すぐに後を追うわ。いってらっしゃい、気を付けてね、あなた。いってらっしゃい、いってらっしゃい、イッテラッシャイ」

そう言って母さんは、何度も、何度も。何度も何度も何度も何度も、父さんの顔を刺し続けた。

喘ぎ声と藻掻く音が次第に聞こえなくなり、毛髪を残した頭皮が床にずり落ち、耳だけを残した顔面がドス黒く染まり、肉の削げる瑞々しい音が、骨を突付く硬い音に変わった頃、ようやく母さんはその手を止めた。

「始めから、こうするべきだったわ。それじゃあサトル、あなたも見送らなくっちゃね。お姉ちゃんも向こうで待ってるわ。待たせたら悪いから、あなたには悪いけど簡単に送らせてもらうわね」

スタンガンを拾って立ち上がる母さん。

その真っ赤な無表情は、瞳の部分だけが虚のようで、僕は生まれて初めて、姉貴の顔は母さんと似ていたんだなぁ、と思いながら、

「いってらっしゃい」

電撃が身体を疾駆するのを感じた。

6

警察病院の面会システムは通常の刑務所とは異なっていて、随分規律が緩いようだ。

僕は中央を強化ガラスで遮断された密室を勝手に想像していたのだが、そんな事はなく、面会の旨を伝えたら普通の病院のような個室に通され、監視のための刑務官は離れた入り口で欠伸(あくび)をしている。

この調子だと、録音されてる心配もなさそうだ。都合がいい。

視線をドアからベッドに移すと、そこには患者服姿の母さんが横たわっていた。

あれから半年が経った。

あの後、スタンガンで気絶させられた僕は間一髪の所で、踏み込んできた警察官に保護されたらしい。

母さんは精神疾患が認められ、刑務所への収監ではなく、この警察病院に収容された。

逮捕当時からずっと放心状態で、ほとんど言葉を喋る事がないらしい。

「・・・・・・・・・・・・・」

顔を覗き込んでも母さんは反応しない。

しょうがなく、一人で喋る事にする。

「やぁ、母さん、久しぶり。元気してた？・・・・って元気なわけないか、ハハッ」

「・・・・・・・・・・」

「あ、そうそう、姉貴の死体ね。母さんの言った通り、近所の山林で見つかったよ。埋めるの大変だったんじゃない？　父さんと二人で埋めたの？　・・・・・・まぁ、僕の精神を参らせて、やってもいない罪を自白させる前に見つかったらマズかっただろうしねぇ」

「・・・・・・・・・・」

「でもさぁ、僕に罪を被せるつもりだったなら、他にいくらでも上手いやり様があったと思うんだけど。まぁ、仕方ないか、母さんも父さんも、あんまり頭良くなかったからね」

「・・・・・・・・・・」

「ああ、父さんと言えばさ、なんでまず姉貴を殺したの？　浮気の現場を目撃したなら、父さんの方から殺さない、普通？」

「・・・・・・・・・・」

「話は変わるけど、僕は今、親戚のトコでお世話になってるよ。ほら、母さんの妹のミキコさんだっけ？　負い目があるからかなぁ、結構良くして貰ってるよ。昨日なんて寿司だったんだよ？　お小遣いまでくれるし、あそこまで露骨に待遇されるのも、ちょっと考えものだよ」

「・・・・・・・・・・」

覚悟はしてたけど、ここまで無反応だと寂しいものがある。しょうがないから、無駄話は辞めにして、言いたかった事だけを告げる事にする。

「いやぁ、流石に驚いたよ、真相を聞かされた時にはさ。まさか母さんがね・・・・・・。でもさ、母さん、ダメだよ。姉貴を殺した時――――」

身を乗り出して、耳元で囁く。

「――――ちゃんと止め刺してないでしょ？」

「――――――――」

母さんの眼が、微妙に動いた気がした。

僕は構わず続ける。

「僕のバットがあった時点で、真っ先に僕が疑われるのは明白だったし、だったらしっかり”殺しとこうかなぁ”って、だって最初の犯人は僕じゃないわけだし、なんたって”いい加減ウザかった”しね。棚から牡丹餅っいうか、漁夫の利っていうか、ラッキーだったよ。そこに関しては感謝してるんだ。もっとも、まさか母さんが犯人で、即行軟禁される事になるとは思ってもみなかったんだけど・・・・・」

「――――ぁ――――ぅぅ」

母さん(おんな)が何か言った気がするが、構うものか。

「それにさ、白状すると、ウザかったのはずっと前からだったんだ。良く出来た姉は不出来の弟にとって目の上のタンコブっていうかさ、姉貴ばっかり可愛がってきたアンタだったらわかるだろ？　・・・・・・姉貴の彼氏の話はしたよね？　実はアレ、紹介したの僕なんだ。勿論、ヒドイ男だって知ってたし、姉貴をどんなヒドイ目に遭わせてくれるのかも期待済みでね」

「――――ぅぅ――さ、さぁ――――」

「あれ？　そうなると、父さんは死に際に”全て俺の所為なんだ”って嘆いてたけど、実は僕の所為になるのかな？　いや、やっぱり運が悪かったんだ。”僕みたいな子供を持った”アンタらの運がさ」

「――――ぁぅ、さ、サト――――」

「そうそう、話は戻るけど、アンタの妹、ミキコさん？　歳のわりには結構な美人だよねぇ。家族の仲も和気藹々（わきあいあい）としててさ、な～んか気に食わないなぁ。・・・・・・・あ～あ、壊したいなぁ・・・・・・」

「――――ぁぁぁ、サぁ、サト――――ルぅ――――」

「話はそれだけ。それじゃあ――――」

僕はそう言って、女を独り残し、

「――いってきます」

部屋を出た。

勿論、刑務官に頼んで鍵を借りて、自分の手で錠を落とすオプションも忘れない。

ガシャン

数ヶ月の軟禁生活に対する意趣返しとしてはスタンガンが足りないけど、僕の気分は晴れやかだ。

だって僕はコワレタ家族の替わりに新品の家族を手に入れたんだから。

ミキコさんの美人説は冗談だけれども、一人娘のキョウコちゃんは悪くなかったなぁ・・・・・。

さて、これから忙しくなるぞ。

6（後書き）

あとがき

この作品は本来長編で書くべき内容の濃さだったのですが、無理くり短編として仕上げた物です。
故に、難解な箇所が多々あったかもしれません。

作者としては、ストーリーや事件の真相等々を読者様に正しく理解して頂けたかどうか、非常に不安が残る始末です。

感想、評価、質問、誤字脱字、なんでも結構ですので伝えて貰えたら嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2805e/

僕ガ壊シタ最初ノ家族

2010年10月26日03時36分発行